

# 学 位 請 求 論 文 要 旨

「つける」とその関連語の語彙ネットワークに関する研究  
—中国語母語話者の日本語多義語習得支援に役立つ分析を目指して

2018年 6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

李 森

本研究は、学習者の多義語習得に対する調査を行ったうえで、「つける」とその関連語に着目し、多義語をどのように記述すれば、中国語母語話者学習者の学習の手引きになれるかを明らかにし、学習者のニーズに応えた多義語の語彙ネットワークモデルの構築を試みたものである。また、本研究は、中国語母語話者学習者の多義語の習得研究であり、その支援への提案をするための多義語の意味研究でもある。

研究内容は、主に、学習者の「つける」の習得に対する縦断的な調査、「つける」とその関連語の語彙ネットワークの構築の2つであり、6章から構成されている。

まず、序章では、本研究の動機と目的、研究内容と課題、研究方法を示した。筆者は自分の学習と授業実践を振り返り、そして、学習者の日本語の多義語の習得が進まないことなどから、多義語の指導の改善を考えるようになった。そこで、本研究では、中国語を母語とした学習者が日本語の多義語をどのように習得していくのか、多義語の個々の意味を習得するとき、どのような扱いがなされているのかなどの問題を解決したうえで、教育現場に生かせる多義語の分析方法を探ることにした。

そこで、学習者はどのように多義語を学習し、意味を推測・理解しようとしているのか、学習者のために多義語をどのように記述すればいいのかという2つの中心課題を設定した。意識調査としてのアンケート調査と質的調査をともに行い、学習者の学習・習得状況を把握することにした。そして、認知意味論の枠組みで、コーパスの実例とコロケーションを用いて多義語の意味分析を行い、語の多義ネットワークを構築したうえで、中国語母語話者学習者のために、多義語語彙ネットワークを構築することにした。

第2章では、中国の某大学で日本語・日本文化、日中翻訳通訳を専攻する中国人大学院生89名を対象とし、意識調査としてのアンケート調査を行った。調査の目的は、学習者の多義語習得、特に多義動詞の習得状況を把握すること、学習のストラテジーを調査し、その問題点を発見すること、習得調査と意味記述の事例研究の対象語を選出することの3点である。

この調査では、多義語学習の困難度、学習の方略、多義動詞に対する認識などの項目を設けた。この上級日本語学習者を対象とした意識調査を通して、中国語母語話者学習者の多義語の学習と習得の現状を把握することができて、学習者の立場からの多義語研究をする必要があることが分かった。また、調査結果に基づいて、事例研究の対象を「つける」に定めた。

第3章では、先行研究の概観を行い、本研究の位置付けを示した。まず、多義語の定義についての先行研究をまとめた。また、多義語の分析方法をめぐって、これまでになされた様々な提案の中、国広哲弥、森田良行、田中茂範の研究を代表例として挙げ、比較を試みた。さらに、認知言語学における多義語研究の課題と研究方法を列挙し、本研究に關係する理論について述べた。

また、第二言語習得論の先行研究についての検討では、多義語を対象とした語彙習得研究の課題を示したうえで、多義語の習得研究におけるプロトタイプ・スキーマとネットワー

クモデル、コア、コロケーションの応用について考察した。そのうえで、多義語についての研究成果は日本語教育の現場には十分に反映されていないこと、日本語教育における多義語習得・指導の面から検討の余地があることを示した。

さらに、先行研究の検討を通して、本研究の位置づけを示した。この研究は、中国語母語話者の日本語習得という観点から、多義語とその関連語を統括できる語彙ネットワークを作り、学習者の日本語多義語習得に役立つ多義語記述を目標にして、学習者のニーズに応じた多義語分析の可能性を探ることになっている。そこで、本研究を、多義語の意味分析に関する理論研究からスタートし、学習者の多義語習得支援を目標とする実用的な目的を持つ、応用研究への橋渡しの手法を探る研究であるというように位置付けた。

第4章では、2章のニーズ調査の結果に基づいて、「つける」の習得過程に対する縦断的調査を行った。この質的調査は、中国語母語話者日本語学習者6名を対象としたものである。調査期間は、約2年間（2014年9月～2016年6月）で、調査の中心課題は、学習者の「つける」を代表とする多義語の習得プロセスを究明することである。調査では、事例研究の研究手法を用いて、教科書調査、授業観察、インタビュー、テスト調査など多くの調査方法を利用してデータを集めた。そして、内容分析という分析手法でデータを調査別、調査協力者別でそれぞれまとめたうえで、調査の結論を導いた。

具体的な調査課題は、学習者の習得順序と教科書の提出順序、習得の難点といった習得調査の結果に関わる課題と、意味の推測と理解のストラテジー、学習方法、学習者の中の「つける」プロトタイプ形成、スキーマ形成、意味のネットワークモデル形成、母語の転移（影響）といった調査の結果をもたらす要因に関する課題である。

調査を通して、9つの結論が得られた。(A) 学習者の習得順序は、教科書の提出順序とは一致していない。学習者には、インプットの少ない意味、母語との対応関係が見つからない意味、抽象的な意味は習得しにくい、(B) 「つける」の学習には化石化現象が見られ、1つの語義に対する徹底的な理解、未知の語義への推測、類義語との使い分け、関連語との関わりの理解といった深い語彙学習は行われていない、(C) 「つける」の意味習得において、意味の理解と産出はアンバランスな状態であると見られるため、意味の理解と産出を両方重視すべきである。特に、産出の助けとなる意味記述を目指すべきである、(D) 学習者の、多義語のプロトタイプ義の学習を強化する必要がある、さらに、プロトタイプとスキーマを確実に理解したうえで、意味拡張の種類を認識し、多義のネットワークを形成させる支援も必要である、(E) 教師、教材、また学習者自身も語彙量を増やす際に、語と語の関係構築にあまり注意を払わない傾向が見られるので、意味の連続性、他の語との関連性を学習者に意識させる支援をすべきである、(F) 第二言語学習者は、母語を介して目標言語を学ぶ段階があり、母語の概念に依存し、目標言語の語彙と母語の語彙との対応関係を見つけて学習を進めていくので、母語の正の転移を促進し、負の転移を抑制する工夫が必要とされる、(G) 学習者の多義語習得を支援するには、語彙ネットワークを構築し、当該の多義語だけではなく、その関連語も入れるべきである、(H) 共起語との

関係を軽視する傾向が見られるので、コロケーションで語義を示す場合には、共起語の使用範囲の広がり提示の重点を置き、分かりやすい連語から意味を学習させるべきである、

(I) 授業実践者は積極的に学習者の多義語習得を支援し、語の多義性の存在と多義語の性質を認識させたうえで指導を行うべきである。

この縦断的な習得調査を通して、学習者の多義語「つける」に対する理解の発展、認知プロセス、学習戦略の選択と運用、母語転移のプロセスなどを確認できるものと考えられる。

2章と4章の学習者に対する学習・習得調査の結果をふまえ、3章の先行研究に基づいて、第5章では、「つける」とその関連語の意味記述を行い、中国語母語話者学習者の語彙習得支援に役立つ多義語分析を目指した。「つける」の意味分析をするにあたり、辞書・辞典やインターネットで公開された『基本動詞ハンドブック』などの意味記述を検討し、学習者の立場から問題点を洗い出した。また、4章の学習者に対する縦断的な調査およびその結果を考慮し、学習者のニーズに応える多義語を記述する際の方針を定めた。

その方針は9つの項目からなる。それは、①中心義を設定し、語義項目間の関係を明らかにする、②どのレベルの学習者にも見せられるような多義ネットワーク図にまとめる、③分かりやすさを心がけ、解説的な語義記述にする。学習者の分かりにくいところに記述の重点を置く、④意味ネットワークを構築する。そのために、難解のもの、まれにしか使わないものは除き、また、語義項目数が多いことをよしとしない、⑤学習者の母語に配慮し、母語干渉の生じやすいところを明確に示す、⑥語彙量を増やすのに有益なネットワーク図を提示する、⑦用法をコロケーションで提示する。コロケーションを重要視する、⑧当該語と関連付けながら、その関連語を記述し、提示する、⑨語彙ネットワークを構築する、である。

続いて、学習者の多義語学習におけるコロケーションの重要性を示し、コーパスにより、定型文「BにAをつける」について考察を行った。その次に、記述方針に従い、「つける」の意味分析をした。コーパスによるコロケーションや実例などを抽出して、認知言語学の理論の枠組みで、「つける」の多義ネットワークを作り出した。また、「つける」の関連語に属する複合動詞、複合名詞、類義語、反義語、自動詞「つく」などについて「つける」の意味に関連付けながら記述した。さらに、中国語母語話者に独特な学習ニーズに応じて、定型文「BにAをつける」と中国語の対照も検討した。最後に、「つける」とその関連の意味を語のネットワークの中で捉え、学習者のための「つける」の語彙ネットワークを構築した。

最後の終章では、習得調査と意味分析の結果をまとめ、総合的な考察を行った。また、本研究の調査や分析などについての反省、今後の課題を示した。